

郷土の会だより

発行責任者
岡村昭則

川越祭に行ってきました

横系の会(10月16日)

先日の、郷土のコース会の時に、一班のメンバーで川越祭を見て懇親会をしましょうとの提案に、全員の都合は取れませんでした。集まれる目処がなかったので、16日に、川越祭見物と懇親会を開催する事としました。

16日JR川越駅に5名が集合。改札出た所から既に混雑しています。人の流れに任せて商店街通りを歩いたが、元々広くない道幅なのに、露店が出ている為、更に道が狭く、年末のアメ横を歩いているような感じです。松江町あたりから、中央通りにでてしばらく行くと山車がこちらに向かつてきました。仲町、札の辻あたりで方向変換をする山車を見て、市役所から戻り行程でJR川越駅と向かいましたが、4時頃迄に戻る予定が、混雑もあり30分以上遅れてしまいました。大宮の懇親会会場には15分位遅くなりましたが、ここで、伊藤さんが合流して、6名で懇親会。食べて、飲んで、飲んで食べて、話して、楽しい時間を共有してお開きとなりました。(天谷範夫 文・写真)

歴史 川越城下の大半が焼き尽くされた

1688年の川越大火の翌年に幕府老中首座であった松平信綱が川越藩主となり町の再興が為される中、1688年、松平信綱が二基の神輿・獅子頭・太鼓を寄進、川越総鎮守である氷川神社の神事として神輿渡御信綱が行われるようになった。1951年には祭礼となる。経済的に繁栄した川越商人の町方文化が花開いて、1988年には踊り屋台が、1989年には商人町と職人町であった城下の十ヶ町に人形山車が登場するなど変遷を經る。

江戸時代から「小江戸」と呼ばれた川越では祭りも江戸神田明神の神田祭など天下祭の影響を強く受けており、幕府の影響を色濃く受けた天下祭が東京では明治維新以後に新政府によって解体され山車が無くなって神輿中心の祭りに変貌した現在、江戸天下祭の伝統が今日でも最も生きている祭りの一つである。

特徴 川越まつりの特徴として、氷川神社の神幸祭の付け祭りが発展したものが現在の川越まつりであり、関東では数少ない山車のお祭りである。現在、神田祭や三社祭などに見られる神輿のお祭りではない。山車の曳き回しと山車の舞台上での囃子の演奏がされる。「川越まつり参加の山車」は29台存在する。町内の象徴であり神が天降る座である山車のほとんどは三層、人形上下、枠上下型の江戸系川越型で、車輪は四ツ車と三ツ車である。二重鉾の最上部には山車ごとに異なった人形を飾りつけ、人形の名前

が山車の名前にもなっており呼ばれることが多い。人形は神話、民話、徳川幕府と川越藩にちなんだ人物などから題材が選ばれている。明治以前に作られた人形には仲秀英、原舟月などの江戸の名工の作品が多く残る。多くの山車が廻り舞台になっているのも特徴である。また、囃子は神田など江戸からの囃子の流れを汲み、山車ごとに乗る込む囃子連が決まっている。現在では山車を所有している町内の中に囃子連が存在することが多いが、かつては近郊の農村部の囃子連が乗っていた。川越まつりが毎年開催されるようになってから山車所有町内の中に囃子連の発足が始まった。現在でも仲町の山車に乗るのは中台囃子連、志多町は府川囃子連などの旧町内と郊外の町の囃子連という形も残っている。曲目は「屋台」「四丁目」「ニンバ」「鎌倉」などがあり「天狐」「おかめ」「ひよっこ」「獅子」などが舞う。それぞれの山車は、毎年15台前後がまつりの際に曳き回される。





みどころ 山車と山車が道ですれ違ふときに、山車と山車を向かい合わせることを「曳っかわせ」という(この「曳っかわせ」、会所へのあいさつが川越の山車の特徴である廻り舞台を発展させた)。時に交差点で何台もの山車で行われることもあり、夜の「曳っかわせ」は川越まつりで一番盛り上がる場面となっている。

秋祭り刻を忘れて楽しみぬ